

近世秋田の都市形成に関する研究

Process of the City Formation of Akita in the Edo Era*

木村 一裕**・清水浩志郎***・三浦 大和****

by Kazuhiro KIMURA**・Koushirou SHIMIZU***・Hirokazu MIURA****

1. はじめに

今日の情報化、国際化、高齢化の進んだ社会において、人々が安全に安心して住むことができるとともに、住むことに誇りと充実感を持つことのできる都市が望まれている。そのような中で歴史的遺産や、歴史的町並みに対する関心の高まりから歴史的なものを保護しようという動きが高まっている。

近年では福岡県柳川市、埼玉県川越市など歴史的町並み保存と「まちづくり」「まちおこし」を連携させ、民と官が協力しながら町の活性化のために活動し注目されている。

このように都市の歴史や風土を考えたまちづくりが全国各地で行われるようになり、都市計画においても歴史的文化遺産がまちづくりの重要な要素となってきている。

秋田市は秋田県の中央に位置する秋田県最大の都市であり、人口約31万人を擁する中核都市として、また、環日本海における文化、経済の拠点都市として着実に発展を続けてきた。現在の秋田市のまちづくりの原型がなされたのは、1602年に初代秋田藩主佐竹義宣が常陸国から秋田に国替えとなり、現在の秋田市千秋公園に久保田城を築き入城したときである。2004年は秋田駅東口に拠点センターが建設され、秋田中央道路の建設が始まり、秋田市と隣接する河辺町、雄和町が合併するなど新たなまちづくりが行われようとしている。

現在の都市のありようは、これまでの歴史の積み重ねによって形作られたものであり、今後のまちづくりを考える際にも、都市の歴史を理解したうえで、継承し、展開することが重要であると考えられる。土木分野の研究として、秋田市の都市形成に関して歴史的な視点から研究したものはみられない。そこで本研究では現在の秋田市の原型となった近世秋田の都市形成過程を、歴史的な視点から把握することを目的とする。

2. 研究の方法

本研究では秋田市史のような秋田市の歴史に関する文献をもとに文献調査を行った。

調査内容は、近世秋田の成り立ちを調査し、久保田城下町の構造と機能、近世秋田の都市の機能と配置、まちの運営と維持の方法を調査した。

研究の対象地域は現在の秋田市地域である。また、本研究で近世と呼んでいるのは佐竹義宣が秋田へ入部した慶長7年(1602)から廃藩置県によって秋田県となった明治4年(1871)までの期間である。

3. 佐竹氏の入部と築城

常陸国を470年間にわたり治めてきた佐竹氏は、慶長5年(1600)の関ヶ原の戦の後、慶長7年(1602)に秋田に転封された。藩主の佐竹義宣は、当初旧領主である安東氏の居城の湊城に入城したが、翌8年(1603)には内陸の神明山に新しく城を築くことにしている。翌9年(1604)にはこれを久保田城として居城を移し、湊城は破却された。湊城を廃棄して他所へ居城を移そうとしたのは、家臣達を収容するには城地が狭小で湊城が要害ではなかったからだという理由が通説となっている。築城に際しては、神明山の西端直下を流れている旭川が居城を崩すことをさけるために、旭川をやや西に掘替えた。具体的になぜ神明山を居城とすることに決定したかは定かではないが、表-1の内容の土地選定理由が考えられる。

表-1 久保田城築城の土地選定理由

- ・神明山の位置が秋田の中央であった
- ・旭川を利用した雄物川、土崎湊の交易上の利点
- ・神明山周辺が山や沼に囲まれた要害であった
- ・元は農村があるだけの広い平野だったので新たなまちづくりが行いやすかった

これらの理由から軍事的要素に加えて新たな都市計画を行うことを見据えての城地の選定が行われたのではないかと考えられる。

* キーワーズ：土木史、都市計画、近世

** 正員、博(工) 秋田大学土木環境工学科、教授

秋田市手形学園町1-1、Tel: 018-889-2368

e-mail: kzkimura@ce.akita-u.ac.jp

*** フェロー、工博、秋田大学、名誉教授

**** 学生員、工修、秋田大学大学院土木環境工学専攻

4. 久保田城下町の構造と機能

(1) 久保田城下の構成

図 - 1 に久保田城下町の構成図を示す。

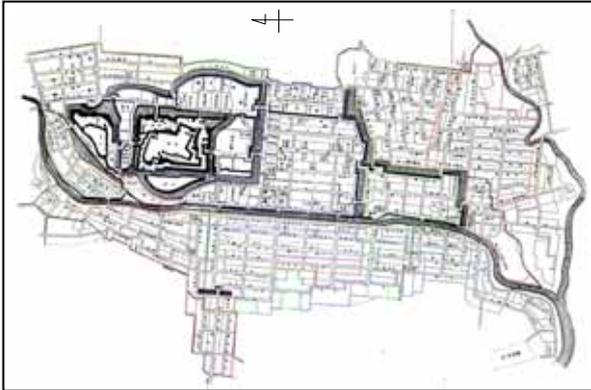


図 - 1 久保田城下町構成図

(秋田沿革史大成付録図を三浦が加工)

久保田城下町全体の東側には多数の山と広大な沼沢地が広がっており、久保田城下町はこの東側を背にするようなかたちで展開する。

久保田城は複数の廓を備えた平山城で、石垣がほとんどなく、天守閣がはじめからつくられないという特徴をもっていた。

久保田城下の町割は堀替え後の旭川を境に東部を内町、西部を外町とした。

内町は、城のすぐ側に配置された侍町で、身分の高い順に武家屋敷を定めていた。

外町は町人町で、商人町、職人町、寺町に区分され、商人町、職人町では専売制の特権(家督)が与えられ、市が開かれていた。家督町では例えば大町三丁目では呉服、反物が売られていた。

寺町には、佐竹氏が転封されたときに常陸から追従した寺や、土崎湊から移転したものが多く、城下町西側の防御の役割を担わされた。

以上の内容から久保田城下町は、城自体の防御は手薄であるが周囲の地形と内町を利用した防御を意識したつくりとなっていることがわかる。また、城下町に商工業地である外町が存在し経済中心地としての機能を持ち合わせていた。これらの内容から久保田城下の構成は軍事的条件だけでなく経済的条件も大きく考えた構成だったと考えられる。

(2) 城下町の形成過程

町割は表 - 2 に示すように、3期にわたって行われ、それ以降は少しずつ外に拡張されてはいるが、城下の主要な地区の整備は1630年頃にはほぼ完了していた(図 - 2)。

表 - 2 久保田城下町の拡張の概要

	年代	整備の内容
第1期	慶長8年(1603年)	久保田城築城、旭川の付替、重臣の町割
第2期	元和6、7年頃(1620年頃)	内町、外町の本格的整備
第3期	寛永6、7年頃(1629年頃)	櫓山、保戸野、手形への下級武士屋敷の造成

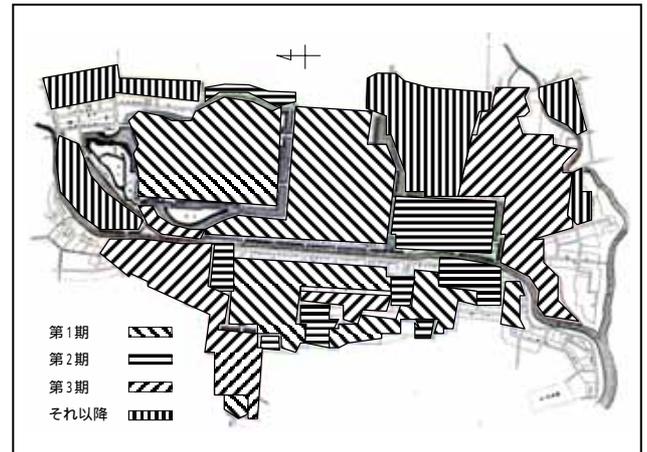


図 - 2 久保田城下町図

(秋田沿革史大成付録図を三浦が加工)

(3) 常陸時代の佐竹氏のまちづくりとの比較

久保田城下町がどのような考えのもとに形成されたかを知る意味で、常陸時代に佐竹氏が治めていた水戸城下町との比較を行った。水戸城下町の概略図を図 - 3 に示す。



図 - 3 水戸城下町概略図

(図説城下町都市の図を引用、加工)

水戸城下町は結城街道と江戸街道が通り、奥州と江戸を結ぶ宿場町としての機能をもっていた。また城下町は台地上の上町と那珂川と千波湖に挟まれた下町より成立しており、両者には武家町と町人町が存在していたが、武家町は上町に多く、町人町は下町に多く配置された。

久保田城下町と水戸城下町を比較すると表 - 3 に示すような共通点が挙げられる。

表 - 3 久保田城下町と水戸城下町の共通点

- ・ 城下町が川と沼沢地に挟まれている
- ・ 城下町を街道が通っている
- ・ 侍町と町人町の分離が行われている

このように久保田城下町は常陸時代のまちづくりを継承しているものと考えられる。

5. 近世秋田の都市の機能と配置

(1) 交通

江戸時代の主な交通の手段として、船を使った水運と徒歩や馬を使った陸運の二種類があった。とくに久保田城下では旭川と羽州街道が利用された。概要を表 - 4 に示す。

表 - 4 旭川と羽州街道の概要

利用された経路	概要
旭川・雄物川	<ul style="list-style-type: none"> 旭川が城下町を貫流し、雄物川と合流したのち日本海に至る 近接して多くの船着き場があり、船を使って人や物が行き来する 船場直行便と呼ばれる小船で荷を運ぶ独特の方策をとっていた 主に米と、一部の特産品、生活必需品が運ばれていた
羽州街道	<ul style="list-style-type: none"> 内町の外側を通り、外町の中を通り抜けて八橋村、土崎湊に至る 街道の整備、維持は沿道ないし近隣の村々によって行われていた 羽州街道を基幹として脇街道が整備されていた 宿場町が設置され、通行者に馬や人足を提供する伝馬役が課せられていた

羽州街道は秋田領内唯一の基幹道路で陸運の要であった。羽州街道の通っていない部分には脇街道が整備され、羽州街道を要として交通網が形成されていたと考えられる。また、陸運の結節点として宿場町が存在し、この宿場間をつなぐ公共交通的なサービスとして伝馬役が存在していたと考えられる。

旭川は数多くの船着き場があり、城下町から各地へ人や物を運ぶ重要な手段となっていた。また、雄物川の河口に土崎湊が位置していたため、雄物川の水運は土崎湊を中心として独自のシステムを構築していたと考えられる。雄物川で運ばれた物の特徴として、米の廻漕を第一として、一部の特産品と生活必需品の廻漕が行われていた。

これらの内容から近世秋田は羽州街道、雄物川・旭川という二大交通幹線によって交通が成り立っていたことがわかり、これらの利用を意識して、人や物の流れがなされていた。

(2) 久保田城下町周辺の都市の機能

雄物川・旭川と羽州街道という二つの交通幹線と久保田城下町を結ぶ交通の結節点となっていたのは土崎湊と八橋村と川尻村であった。表 - 5 に各地の概要を、また図 - 4 にその配置を示す。

表 - 5 交通の結節点の概要

結節点	各地の概要
土崎湊	<ul style="list-style-type: none"> 城下町の海の玄関 西回り航路を利用して上方と米等が流通 港町であるとともに宿場町であった
八橋村	<ul style="list-style-type: none"> 久保田城下と土崎湊の間に位置する 数多くの寺社や茶屋
川尻村	<ul style="list-style-type: none"> 旭川と雄物川の分岐点に位置する 雄物川 旭川 城下町へと船が乗り入れられた 渡船場があり、新屋と結ぶ渡し場でもあった

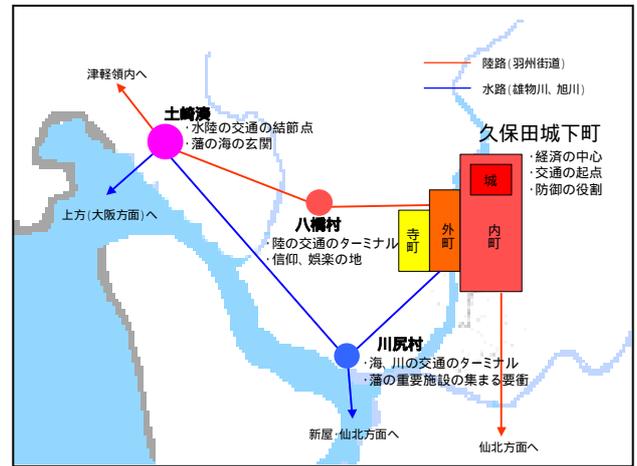


図 - 4 近世秋田の都市の配置 (作成: 三浦)

土崎湊は港湾施設が整い、城下町の海の玄関となっていた。それに加えて羽州街道の宿場町でもあったので流通の中心地となっていたことがわかる。またこのことから水運と陸運を結ぶ交通の結節点だったと考えられる。

八橋村は多くの寺社や茶屋があったため参詣や遊覧で賑わい、遊楽地の役割をもっていた。また、羽州街道に沿い、久保田城下町と土崎湊の間に位置していたことから、陸の交通の結節点だったと考えられる。

川尻村は藩の重要施設の集まる要衝であった。また雄物川と旭川の合流地点に位置し、港であったために水運の交通の結節点だったと考えられる。

これらの内容から土崎湊、八橋村、川尻村は交通の結節点であったことがわかる。また、異なる都市機能を持っていることがいえ、都市機能の分散がされていたことがわかる。

(3) 周辺農村との関係

外町で行われていた朝市の事例から、城下町と周辺農村との関係を考察した。

久保田城下町は領内の一大消費地であったために、領内各地から農産物、水産物等が送り込まれていた。なかでも外町の上通町、中通町、大工町は城下を通る羽州街道に沿って成立した丁であったことから、早くから常市として朝市が行われていた。

そしてこの市には周辺の農村から農民がやってきて青物・薪・紫檀などの諸物資を金銭と交換していた。

これらの内容から、城下町には周辺の農村から農民が市にやってきていたことがわかり、市が村と町を結ぶ交易の場になっていたことがわかる。

6. まちの運営と維持の方法

(1) 都市の基盤づくり

都市基盤の整備は幾度かにわたって行われていた。表 - 6 にその概要を示す。

表 - 6 都市の基盤づくりの概要

西暦	年号	概要
1619	元和5年	・上、中級家臣に久保田への集住を命じ、それに伴い町割を直すため、久保田における家作りを禁じた
1629	寛永6年	・大町と馬口労町が直結するように通路割直しを命じた ・同年、通町と大町三丁の家並みを二階建てにするように命じた
1663	寛文3年	・この年に作製された「外町屋敷間数絵図」によると屋敷の間口は4間を1軒前とし、奥行きは大町で25間、他は20間とされていた
1674	延宝2年	・大火が発生、復興の際に道路幅を表通りは5間、横小路は3間にすることにした
1730	享保15年	・大火が発生、復興の際に小羽葺きの屋根を禁止して茅葺きの屋根に強制した ・同年、城下各丁で道幅の拡張が行われた

寛永6年(1629)には通町と大町三丁は羽州街道に面していたために、景観を考慮し家並みを二階建てとしている。また、寛文3年(1663)作製の『外町屋敷間数絵図』によると、屋敷の間口は4間を1軒前とし、奥行きは大町で25間、他は20間とされていた。

まちのづくりは災害にも影響された。延宝2年大火の復興では火災に際しての被害を少なくするために道路を拡張し、表通りの幅を5間、横小路の幅を3間とすることになっている。また、享保15年大火の復興では小羽板が不足したことから、もとは町屋の屋根は小羽葺きに強制していたものを、小羽葺きの屋根を禁止して茅葺きの屋根を強制し、再び城下各丁で道幅の拡張が行われている。このように災害を契機として都市構造が見直されていたことがわかる。

(2) まちづくりにおける町民の役割

外町の各丁は独立した丁財政を持って運営されており、外町における諸施設は各丁によって維持されていた。表-7に事例を示す。

表 - 7 外町諸施設の維持の事例

施設	概要
高札場	・高札場は法度、御触を公示する場所である ・移動、立て直しの際に大町三丁を惣町が半分ずつ負担した
橋	・旭川の橋の普請、修繕は町奉行の管轄におかれた ・普請、修繕の経費や人足はいくつかの丁で負担した
町門	・表通りの隣丁へ通じる上下出入口には町門が建てられていた ・町門の立て直し、修繕は丁の費用で行われた
水汲み場	・外町では旭川の水を飲料水としていたため川端には水汲み場が設けられていた ・利用する丁で共同して組をつくって管理していた
その他	・丁内の道普請は丁ごとに行われた ・丁境には水路があり小橋が架かっていたが、維持は小橋に関わる各丁が共同で行っていた

この内容から、丁ごと、または丁が集まって城下町の施設の維持が行われていることがわかり、そこに住む人々の手によってまちが支えられていたことがわかる。

また、感恩講と呼ばれる困窮人救済のための、町人の設立した基金もあり、その内容から住民同士の助け合いがあったことがわかる。

7. まとめ

本研究の成果として以下のような内容がわかった。

(1) 久保田城下町の構造と機能について

佐竹義宣は都市を一から新しく創ることを見据えての土地選定を行っていた。城には石垣や天守閣が無く、城自体の防御は手薄であるが、周囲の地形や、城に侍町を隣接しておくことで、城下町全体が防御の役割を持っていた。また、城下町内に商業地である外町が存在し経済の中心地となっていた。

以上の内容から久保田城下町は軍事的条件だけでなく経済的条件も考慮した都市計画が行われていた。また、佐竹氏が秋田転封以前にいた水戸城下町と久保田城下町にはいくつもの共通点がみられ、常陸での経験を生かしての都市計画だったと考えられる。

(2) 近世秋田の都市の機能と配置について

近世の秋田は羽州街道、雄物川・旭川という二大交通幹線によって交通が成り立っていた。羽州街道、雄物川・旭川周辺に沿っていくつもの村が存在したが、その中でも土崎湊、八橋村、川尻村は交通の結節点となっていた。また、それぞれの町や村は異なった機能を持っていた。そのため自然と都市機能の分散がなされていた。また、城下町の外町で市が開かれていたため、城下町で物の売買が行われ、外町が流通の中心地となっていたことがわかる。

以上の内容から城下町を中心地として、羽州街道や雄物川・旭川を利用しての周辺の町、村との交流を意識した配置になっていると考えられる。

(3) まちの運営と維持の方法について

都市基盤の整備は幾度にもわたって行われていたことがわかった。また、大火復興の事例から災害を契機に都市構造が見直されていたこともわかった。

外町の諸施設の維持は各丁によって行われていたことや感恩講と呼ばれる町人の設立した基金があったことがわかった。これらの内容から町民がまちへ深い関わりを持っていたことがわかり、地域コミュニティが形成されていたと考えられる。

以上(1)(2)(3)の内容から近世秋田のまちづくりにおいては、計画的に都市の骨格が形成され、これを基盤として、藩による町並みの誘導や結節点が形成され、そしてそこでの人々の営為を経て今日に至っているものと考えられる。

参考文献

- 1) 秋田市：秋田市史第三巻近世通史編、2003
- 2) 渡辺景一：秋田市歴史地図、無明舎出版、1984
- 3) 金森正也：近世秋田の町人社会、無明舎出版、1998
- 4) 佐藤清一郎：雄物川往来誌(下)、秋田文化出版、1979
- 5) 佐藤滋：図説城下町都市、鹿島出版会、2002